



グッバイ、 スマートラタイガー

1月14日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月14日のおはなし「グッバイ、スマトラタイガー」

スマトラトラだなんて、妙チクリンな名前だとあたしは思っていた。日本語だか外国語だかわかんないし。虎が2匹いるみたいだし。どう発音していいかわかんないし。トラトラトラみたいだし。でもそんな風に思うのは日本人だけだ、英語ではスマトラタイガーだ、なんてアイツが言うから急にどうでもよくなってしまった。そういうことじゃないんだよな。

グッバイ、スマトラタイガー。

昨日、回覧が来て、見たら戦地でアイツが死んだって書いてあって。何だよそれ。ふざけんなよ。デタラメやってんじゃねーよ。悔しいやら腹が立つやらで目の玉のまわりが燃えるように熱くなってきたのであたしはそのまま家を飛び出した。広い通りを避けて山の方に走った。村はずれの五平のボロ屋の向こうのしみったれた畑のまわりをぶんぶんぶんぶん走り回った。

グッバイ、スマトラタイガー。

戻ってきたら、アイツのうちに人が集まっていた。家の中ではお悔やみを言いに来た村の人と、アイツの家族が代わる代わる頭を下げていた。戸口の前では手配師みたいなやつが、一人一人にあれを持って来い、これを持って来い、どこに連絡をとれ、誰を呼びに行けと、偉そうに指示をしている。手配師だと思ったのは同級生のフジタだった。フジタは来月戦地に行く。

グッバイ、スマトラタイガー。

スマトラでは時々大きな地震が起こるんだ、とアイツは言っていた。平気な顔をしてたけど、本当は三歳のあの日以来、アイツは地震が恐くて仕方がないことを、あたしは知っている。家が隣同士で赤ん坊の頃から一緒に育って、あの時も同じ部屋にいた。棚の上から箱やら筒やら人形やらが降ってくるのをあたしは面白がってみていたけど、アイツは声もでないほど怖がっていた。でもスマトラでは地震に遭わずにすんだんだ。

グッバイ、スマトラタイガー。

フジタもスマトラに行くんだろうか。センセンはカクダイシカクハウメンでダイセンカをあげています、とラジオは勝ち誇ったように言うけれど、そんなもの拡大しない方がいいに決まっているのは国民学校しか出ていないあたしにだってわかる。センセンが増えれば増えるだけ、ひとつの場所にいられる兵隊さんの数がどんどん減ってしまう。誰がどこに行くのかわからなくなってしまふ。

グッバイ、スマトラタイガー。

フジタがあたしを見つけて近づいてきた。あたしは動けず、その場にいた。級長をやっていた時のフジタや、手配師をやっているフジタは偉そうでバカにしやすいけど、あたしと二人きりで話すときのフジタはマジメで親切でものわかりがよくてすごくやりづらい。アイツみたいに理屈も言わなくて、自分のことをあんまり話さなくて、あたしに喋らせようとするのもやりづらい。そんな優しい目で見られても困る。

グッバイ、スマトラタイガー。

さっきまであんなにきばき手配していたくせに、フジタはいま黙ってあたしの前につっ立っている。だからあたしはスマトラにはスマトラトラってというのがいるらしい、なんて言うつもりのないことを言うてしまう。言いながらバカだと思う。何言ってんだと思う。そしたらフジタは悲しそうな顔をして笑って、こわいんだかこわくないんだかわからん名前だなと言う。でも、そんなのにあいたくないな、ジャングルの中で。

グッバイ、スマトラタイガー。

級長のフジタは偉そうで嫌いだったけど、こういうことを言う時のフジタはあたしと同じだな、と思う。アイツがいて、フジタがいて、あたしがいて、いつも相手をボロカスに言いながら、ボロカスに言ってたのはあたしだけだけど、なんだかんだ三人でいつも一緒だった。和音みたいなもんだとアイツが言って、フジタが笑って、それぞれ違うけどよく合ってるってこと？と聞き、かっこつけてんじゃねーよ、とあたしが言った。

グッバイ、スマトラタイガー。

フジタも同じことを考えていたのか、ひとり減っちゃったな、と呟いて、唇をかみしめた。あたしが何も言えないでいると、フジタは少し笑ってトラトラトラみたいでヘンだよなと言った。スマトラトラだってそんな風に呼ばれたくないだろうに。それを聞いてあたしもその通りだな、と思う。スマトラトラの立場は考えたことなかったけどさ。でも気がついたらあたしは正反対のことを口にしてる。

グッバイ、スマトラタイガー。

そんなことを言うのは日本人だけだよ。英語ではスマトラタイガーって言うんだから。そうするとフジタは厭な顔ひとつせず、目を細めて、ああそうだな、と頷く。それから笑顔とも何ともつかない情けない顔になって、アイツがここにいて話しているみたいだ、と言う。それからくるりと背を向けて、また手配師の顔になってみんなに細かく指示を出し始める。きっといい通夜になるだろう。きっと立派な式になるだろう。

グッバイ、スマトラタイガー。

(「和音」 ordered by イチ--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

グッバイ、スマトラタイガー

<http://p.booklog.jp/book/42274>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42274>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42274>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.